

藤沢周平と庄内

第一回 「回天の門」を巡って

荘銀総合研究所
研究員
佐藤 寛子

私たちの故郷には長い歴史の中で培われた素晴らしい財産がある。それは自然であり、伝統であり、人材である。庄内を舞台に多くの作品を残した藤沢周平の足取りをたどることによって、庄内の価値を再考しよう。今後一年かけて、庄内の四季折々の風景と共に伝えたい。第一回は立川町出身である清河八郎の史実を題材とした小説「回天の門」をもとに庄内を探る。

「どこへゆくべきかと地図をひろげてみたが、なかなか心が決まらない。ただ、気になる土地がある。

庄内である。

都市の名でいえば、鶴岡市と酒田市になる。旧藩でいえば庄内藩（酒井家十七万石）の領域である。ここは、他の山形県とも、東北一般とも、気風や文化を異にしている。

庄内は東北だったろうか、ときに考えこんでしまうことがある。

最上川の沖積平野がひろいというだけでなく、さらには対馬暖流のために温暖であるというだけではなく、文化や経済の上で重要な江戸期の日本海交易のために、上方文化の滲透度が高かった。その上、有力な譜代藩であるため江戸文化を精密にうけている上に、東北特有の封建身分制の意識もつよい。

いわば上方、江戸、東北という三つの潮目になるというめづらしい場所だけに、人智の点だけでいっても、その発達がきわだっていいる。

この『街道を行く』を書きはじめてときから、庄内へ行くことを考えていた。が、自分の不勉強におびえて、いまだに果たせずにいる」

（司馬遼太郎著『街道を行く』29）

在した風土、風習などを明示することで、私は新しい生き方に必要なアイデンティティを確立できたのだと思う。

私はいまは鶴岡市の一部である村に生まれた。村の正面には田圃や遠い村村をへだてて月山がそびえ、北の空には鳥海山が見えた。村のそばを川が流れ、川音は時には寝ている夜の枕もとまでひびいて来た。螢がとび、蛙が鳴き、小流れにはどじょうや鮒がいた。草むらには蛇や蜥蜴も棲んでいた。

私はそのような村の風物の中で、世界と物のうつくしさと醜さを判別する心を養われ、また遊びを通して生きるために必要な勇気や用心深さを身につけることが出来た。私はそういう場所から人間として歩みはじめたことを、いまでも喜ばずにいられない」

（藤沢周平著『乳のとき故郷』）

風の町・立川へ

山形自動車道月山・朝日インターチェンジから車を走らせて四分、国道47号沿い右手に白い巨大な風車が見えてくる。

立川町は出羽丘陵の裾野のゆるやかな高台に在り、長らく日本海からふきつける「清川だし」という強風に悩まされてきた。それを逆手にとって現在は町の施策として風力発電に活用しているそうだ。道に迷った時、風車を見て「ここは立川だ」と安心した経験が何回かある。自らが「風の町」を名乗るだけあってとにかく大きな風車である。

この町の東方に清川という集落がある。清川は内陸地方と庄内地方を結ぶ分岐点に位置するため古くから交通の要とされた。最上川と立谷沢川という二つの流れが町を横断し、立地的に内陸から庄内への入り口にあたるため、明治末頃までは水陸の駅として繁栄したという。参勤交代の一行、商業都市酒田へ向かう商人もいたが、特に賑わいをもたらしたのは出羽三山参詣者が多くいたからである。古くは「義経記」の中で、修験者に変装した源義経が、平泉へ北国落ちの際、庄内清川から船で上ったという記載が見られるように、町のあちこちに伝説や歴史の跡を見ることができる。



庄内は地理的には中央と離れていたが、独自の文化・風習を築いて来た豊かで美しい土地である。その豊かさとは、物質的な豊かさを指すのではなく、四季折々の自然がもたらす、精神の豊穡を培う大地の豊かさであると、この土地を知る人は礼賛する。

鮮やかな自然は、独自の文化と共存し、時には激しく敵対しながら、人々のところに一途な信仰や複雑な思想をばくくみ結果として多くの思策家や文人を輩出することになったのは広く知られるところである。

司馬遼太郎は多作の作家であったが、ついに庄内を主題として描くことはなかった。書き尽くしたと言われた作家が庄内には触れなかったことで未だ秘めたる謎が残されている気がする。

この地には、戦禍を免れた先人の遺産が今も静かに横たわり、長い年月によって育まれた豊かな情念を見ることが出来る。しかし、私たちは自分の生まれ故郷の、その多くを知らない。風土に根差した深い情念を日々の煩雑のなかに置き忘れてしまったような感がある。

城趾、土の匂い、山岳信仰、方言、子供の頃駆け回った田舎道。社会が変容を遂げても、失ってはならない風景がここにはある。

藤沢周平は庄内に生を受け、庄内をこよなく愛し、そして描いた作家であった。

「平穏なサラリーマンの暮らしを捨てて、作家という、明日に何の保証もない不安な職業をえらぶにあたって、私は多分、おまえはいったい何者か、そもそもどこからきた者であるかという、みずから発する無意識の質問に直面したのだと思う。エッセイはその自問に対する自答、私はかくかくの者であるという自己存在証明であったに違いない。エッセイの中に、自分の生い立ちと自分のまわりに母乳のごとく存

清河八郎の人物像

清河八郎は天保元年（一八三〇年）出羽国田川郡清川村（現山形県東田川郡立川町大字清川）に庄内一の醸造石数を誇る酒屋斎藤家の長男として生を受けた。幼名を元司といい、後の清河八郎の名は、故郷清川の川を大河の意味の河に変えて、故郷を立て称したとされる。幼い頃から「論語」「詩経」に親しみ、十八歳の折、跡継ぎになれという親の反対を押し切り、一層の向学を志し単身江戸へ上る。



当時江戸の三大道場と言われた玄武館に剣術を学び、通常では目録をもらうのに三年かかるところを一年で取得、同時に学問を重ね、昌平黌（現東京大学）に学ぶも飽きたらず、自らが文武指南の場として神田三河町に開塾した。江戸広しといえども剣と文を一手に教授するのは「清河塾」だけであったとされる。

清河八郎といえば志士のイメージが強いが「西の吉田松陰、東の清河八郎」とうたわれたほど字才を持つ人でもあった。

（注）

「既に風雲の勢を作し

龍虎互に相馳す

回天の大事業

倡始孰か為す所ぞ」

（清河八郎顕彰会『清河八郎遺芳』）

その書や著作の多くは県の文化財に指定されており、立川町の清河八郎記念館で閲覧することができる。

世が泰平であれば一代の儒家として名をあげたであろうが、幕末の折、外は欧米諸国の開国の圧力、内は將軍家の継嗣問題、井伊直弼が安政の大獄を敷き、その井伊が水戸浪士によって白昼桜田門にて襲殺されるといふ内外騒乱、まさに激甚走るといった風潮のなかで、清河八郎は国を治め、民を救う学問こそ真実と、尊皇攘夷運動の渦中に身を投じることとなる。

作家と故郷

「回天の門」は清河八郎の生涯を余すところなく書いた秀作である。司馬遼太郎・柴田錬三郎も同じように清河八郎を描いているが、そのとらえ方は視点が大きく異なる。

「八郎は士官の途さえ望まぬ、一個の草莽の士であった」

（藤沢周平著『回天の門』）

清河八郎には策謀が多く、その真意を知ることが難しいとされ、歴史の評価は未だ定まらない。倒幕の首魁でありながら幕臣の山岡鉄舟や高橋泥舟と親しく交わり、幕府の許しを受けて募った浪士組をして、倒幕攘夷を画策するなど、事実の表層だけ取り上げるなら理解し難い点がある。

しかし、平成の今もなお誤解のなかにある清河八郎の姿を、一人の悩み深き人間として描くことに成功しているのは、藤沢周平が庄内に生を受けた人の本質を深く理解しているからである。

庄内は多くの思索家や文人を輩出する土地柄であった。高山樗牛、田澤稲舟、近年では丸谷才一、佐藤賢一ばかりである。同郷というだけでひとくくりにするのも滑稽な話であるが、そこには同じ故郷に育った人の気質とも言える類似性を見出すことができるように思える。

「この土地では、控え目に己れを包み隠すことが美德とされる。暗い雲と深い雪の下に、忍従を強いられる風土が、そういう静的な徳目を育てたかも知れなかった。だがそついで、不意に放胆なことを言ったり、したりして周囲を驚かす人がいる。」

それは忍従を強いる風土と身分の枠そのものが育てたもうひとつの土地の性格だった。そういう人間は、ど不敵な人間として、異端視され、おそれはばかられる。

八郎にも、その性癖がある」

(藤沢周平著『回天の門』)

清河八郎を育てたのは、この庄内という風土である。

八郎が故郷を遠ざけたのは、自分はその土地に生まれたという強烈な自意識の裏返しであり、故郷を思う気持ちが強ゆえのアンチテーゼであった。あとがきにも「八郎を家郷出奔に駆りたてたものは、出世とは別の、一種の閉塞感だったと思われる」との指摘が見られるように、幕末、米沢藩に雲井龍雄という志士がいたが(藤沢周平著『雲奔る』参照)、その雲井龍雄といい、清河八郎といい土地独特の「一種の閉塞感」に裏打ちされ出てきた志士である。閉塞感とは、三方が山に囲まれているといった地理的条件ではなく、その土地に長い歴史で伝わってきた風習や伝統のようなものである。

庄内でいえばそれは徳川親藩としての自負、と指摘できる。

藤沢周平がそういう郷土の歴史を背景に「清河八郎」という倒幕の先駆ともいえる人物に焦点を当てて作品を書くことは、沈黙を守ってきた郷土の歴史に抵触することであり、相当苦心したと推測される。

「筆者は長い間、清河八郎はやく来すぎた志士で、そこに彼の悲劇があつたのではないかと考えていた」

(藤沢周平著『回天の門』)

仮に、清河八郎が尊皇攘夷論に沸く西日本に生まれていたら後世の評価は違ったものになっていたかもしれない。

歴史を眺めると、必ずしも正義が勝利するわけでもなく、非論理的でも時勢が味方すれば勝つ場合がある。

庄内藩は戊辰戦争で負けたが、そこに信念がなかったわけではない。確固とした信念があつたために、それに殉じたのである。

勝者には勝者の論理があるように、敗者には敗者なりの論理がある。清河八郎を敗者とは呼ばないが、同郷の作家の責務として、志半ばにして命尽きた人の懊悩を書かざるをえなかったのではないが。

歴史や、人間の知られざる暗い部分に光を当てるのが作家の仕事であり責任である。幕末の複雑多岐な情勢の中、己の成す道を模索する清河八郎と、書くことによって自分の本質を問い正そうとする作家の姿は重なる。

藤沢周平という作家の原型を作ったものは、庄内という土地に他ならない。そして、清河八郎という郷土出身の志士を描いたのは恐らく必然だったのではなからうか。

私たちは作品を通して、より深く庄内と向き合うことができる。

美しい清川の景色と、藤沢周平の書く「回天の門」が調和して、見事に庄内が湧き上がる。手元にある作品を手掛かりに、庄内を歩いたら新しい発見がありそうだ。

(注) 回天信始とは八郎が好んで自らを称した言葉である。西国は倒幕、東国は攘夷に沸く時勢、国の統一のための魁となる志を歌ったものである。

(写真提供/立川町企画開発課)